学生会中執から新入生諸君へ

未来を担い得る者

同じ現実を共有している

米田隆介

新入生諸君！学生中央執行委員会は、諸君らに歓迎の意を表するに先だち、三月国立大学一期校を中心に闘われた入学試験阻止闘争に就いて基本的な見解を明らかしておきたい。

周知のごとく国立大学一期校、就中京都大学入学試験阻止闘争は東京大学＝日本大学を二大頂点として展開された全国学園闘争、六七年十月羽田闘争以降の反戦反安保闘争と無縁なものとして存在しているわけではない。

日本大学においては、体育会を中心とする学内暴民と学外極右団体によるファシズム的集約の下に、戦後一貫した秩序が存在していたのであり、その鉄鎖を断ち切るべく一〇万学友の決起が実現したのである。しかも、闘争は右翼・大学当局・政府公安当局、三位一体の攻撃にも屈することなく、現在もなお実力闘争を堅持している。東京大学においては現行医療制度の改悪に反対し、現行教育秩序の改革を要求するところに端を発し、国大協＝自主規制路線の粉砕、産学協同による学生の労働力商品化の粉砕を通して、現行大学の日本帝国主義に対する加担を阻止していく闘いへと進展してきた。

この闘いの質は六八年十月二十一日に示された安保粉砕から、日本帝国主義の打倒を展望する反戦闘争の質的内容の下に京都大学においては現行大学が六五年以降対外膨張を開始した日本帝国主義の国内抑圧と、海外侵略・反革命政策に加担するものであることを暴露し、現行大学の解体と日本帝国主義打倒の目的意識性を示したものとして入学試験阻止闘争が闘い抜かれたのである。

学生会中央執行委員会は、現在全国的に展開されている諸学園闘争、就中京都大学を中心とする入学試験阻止闘争に熱烈な支持と激励を送り、それは現行大学に生活するわれわれ自身に対する自己批判であり、しかもなお、そのような闘いがわれわれの存在それ自体の矛盾の止揚を啓示するものとしてあるがゆえである。従って新入生諸君に対するわれわれの歓迎の意は複雑なものとならざるを得ないのだが、しかしわれわれは諸君等らに対して前述の問題を決して潔癖的に語ることはしない。

われわれは諸君らにわれわれが同じ時代を、同じ現実を共有していることを明示しておこう。大学は現実的には自由の空間として存在し、四年間は「有余の季節」として存在するというのが通俗的な見解である。このような見解にわれわれの現行大学体から、日本帝国主義打倒を展望する不断の闘争は、恣意的なものとしてしか映らないであろう。われわれは現代世界に存在するあらゆる矛盾の再検討を、その生成基盤の検証とともに要求しました、自ら明白しているのだ、そうであるがゆえにわれわれの世界認識はよりラディカルでなければならない。しかもそれは、知的欲求の充足にのみ止まるものではない。われわれは観念の世界にではなく、現実の社会に存在する権利を主張していくものであるし、それはいつもよりラディカルでなければならない。学園闘争は大学内改良を目的化するものではない。不断に大学に、そして社会生活全般に且って侵入する帝国主義の解体をこそ目的とする。

われわれ闘争は、従って永続的なものでなければならない。学園内改良闘争の経験が帝国主義との対決の必要性を認識させてきたのだ、慶応＝早稲田＝明治と続いた学園闘争の敗北過程、そして日大＝東大の闘争の過程の総括が帝国主義との対決をわれわれに迫まるのだ。信州学園闘争においても、闘争圧殺の手が大学当局のみならず国家権力を背景として伸びてくる。われわれは決して恣意的に闘争を始めたのではないし、そのような闘争経験がわれわれの主張の正しさをより鮮明に表現するものであるがゆえに、蓄積した実力闘争でそれらを凌駕していかなければならない。

われわれは戦後世代の苦渋の軌跡を、更にわれわれの足跡で泥にまみれさせ続けなければならないだろう。八月十五日の名状し難いと言われ、にも関わらず無数の言葉に包まれた時代を、その空間をわれわれは知らない。われわれは八月十五日の肉体的体験の欠除を負い目にはしない。われわれは誇り高く「ヒットラーなんか知らない」ことを秘かに自負しているのだ。われわはあらゆる歴史の潮から遠い上がってみせるだろう。おずおずと「おそらく」なる言葉に助けられてこう語った人がいる。「彼らこそは日本にはじめて生まれた自立した個人なのだろう」と。われわにそのような誇りは必要ではない。「日本にはじめて生まれた自立した個人」であることを標榜するに決してやぶさかではない。しかもそのことは、われわれ自身が現実の行動の中で証明していかなければならないのだから。

われわれは、われわれとともに同じ時代を、同じ現実を共有せんとする全ての新入生諸君の入学を心から歓迎するものである。われわれが未来を担わなければならないのであり、われわれのみが未来を担い得るのだ。

（政経四）

×　×　×